

## 新座ワークショップ 3月4日(土)

### 高齢者グループリビングの社会的普及に向けた実践的研究報告会



3月4日土曜日にNPO法人暮らしネット・えん主催、グループリビング運営協議会、慶應義塾大学SFC研究所地域協働・ラボ共催、公益財団法人JKA後援で「新座ワークショップ 高齢者グループリビングの社会的普及に向けた実践的調査研究報告会」を埼玉県新座市のグループリビングえんの森で開催しました。

参加者は総勢41名で、グループリビング運営者や、ボランティア、居住者、グループリビングを作りたい人、グループリビングに興味のある人、研究者が集まりました。

グループリビング運営協議会会員の研究者や実践者8人が首都圏、関西圏を中心に18ヶ所の高齢者小規模共同居住の運営者と潜在的運営者を対象に昨年9月から今年3月まで調査を行い、その成果を発表しました。

今回、調査対象とした高齢者小規模共同居住11件は、どれもたいへん魅力的なものでした。これらの事例は多様な運営形態を持つものであり、1つの類型にまとめることはできません。各運営者が自分たちの理念のもとに、既存事業との関係、土地や建物の手当て、地域ニーズの把握、

社会資源の活用などの組み合わせの中から、それぞれの独自のスタイルを作り出してきたからだ  
 と思います。また小規模共同居住の潜在的運営者7件も、地域のニーズを汲みながら様々な活  
 動を展開しており、様々な可能性を感じました。

この調査は3年計画で実施する予定であり、今年度はその1年目にあたります。来年度以降は  
 対象事例を全国に広げるとともに、高齢者グループリビングの実現のためのいくつかのモデルを  
 提示することをめざして、調査の視点を明確にしていきたいと考えています。



### ■ 報告会スケジュール (3月4日)

時間	内容	発表者等	発表者等
13:30	開場		
13:30~13:50	えんの森見学会		
13:50~14:00	開会の挨拶	NPO 法人暮らしネット・えん 代表	小島 美里
14:00~14:05	調査概要説明	慶應義塾大学 SFC 研究所上席所員	土井原奈津江
14:05~14:15	調査報告 1	慶應義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程	近兼 路子
14:15~14:25	調査報告 2	立教大学大学院社会学研究科博士前期課程	林 和秀
14:25~14:40	調査報告 3	慶應義塾大学 SFC 研究所上席所員	土井原奈津江
14:40~14:50	調査報告 4	神戸山手女子短期大学生活学科 准教授	中西 眞弓
14:50~15:05	調査報告 5	兵庫県立福祉のまちづくり研究所 研究員	宮野 順子
15:05~15:25	ティータイム		
15:25~16:55	パネルディスカッション	慶應義塾大学総合政策学部 教授 神戸女子大学名誉教授 NPO 法人暮らしネット・えん 代表 その他	大江 守之 上野 勝代 小島 美里 調査報告者
16:55~17:00	閉会の挨拶		小島 美里
17:00	閉会		

## 参加者の感想

様々な事例があり皆様の苦労、工夫、仲間づくりなどがわかりました。社会的普及と言うタイトルがついていますが、そのための仕組み作りには何が必要か、持続可能となるためにはどのような支援が必要か、といったことをもっと全員(入居者も事業者も支援者も)が認識することが急務だと思います。同時に人にやってもらうこと(誰かが事業してほしい、良いものがないとかの批評など)ばかり考えている人が多いが、自分が人の為にも何かをしようという意識変革も必要だと常々感じます。少数の主導的な人にだけでなく、それぞれ個々人の小さなやれること(お金、希望等)を出し合い、一緒にやってみることが自立していることともいえるが高齢者には特に大事であると思います。(コレクティブハウスのコーディネーター)

多種多様なサービス部門に働く(ボランティア含)方々のご苦労と次世代へのバトンタッチ(継続維持)は、大変なことと思われます。陰ながらですがお役に立ちたいと思っています。(ボランティア・グループリビングに興味のある人)

意見や経験を参考にしたいと思って参加しました。オーナーと運営者が別々にあるこの事業形態の可能性を感じました。グループリビングが単独として事業として成立するかどうか。成立させるために何が必要なのか。様々な複合事業の中でしか成立できないのか。まだ検討の余地がありそうな感じです。(生協法人)

いろんなグループリビングがあることを知ることができました。比較検討ができるともう少しわかりやすかった。例えば①医療介護の点で最後まで住み続けることができるか、②地域多世代との交流サポート体制、③大きな特徴、④今後の問題点(グループリビングを作りたい人)

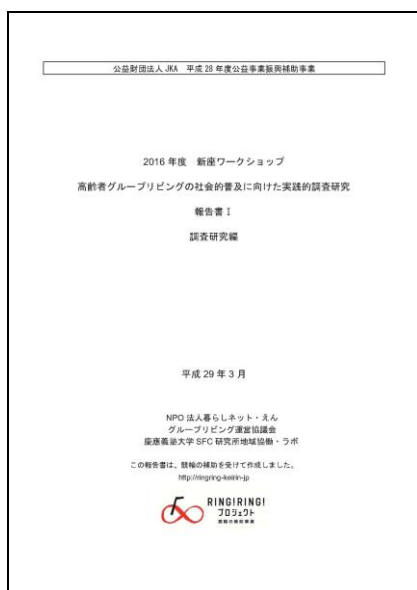
様々な事業形態、運営などを知ることができ参考になりました。今後連絡させていただくこともあると思っています。よろしくお願ひします。COCO 湘南台を手本にスタートしたのですが、その後の問題を知り、今後活かして行けたらと思ひました。(グループリビング運営者)

様々な運営母体があり、この部分をもっと深く知りたい思うところも多々あり今後も情報交換勉強会に行きたいしています。(グループリビングを作りたい人)

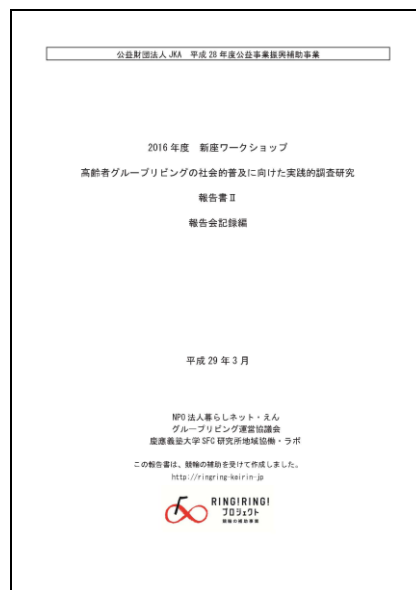
勉強になりました。上野様の熱い思いをお聞きして涙が出そうになりました。これから仕事で本日お聞きした話を活かして取り組んでいこうと思ひます。(民間企業)



## 報告書Ⅰ（調査研究編）、報告書Ⅱ（報告会記録編）が完成しました！



報告書Ⅰ（調査研究編）94 頁



報告書Ⅱ（報告会記録編Ⅱ）58 頁

グループリビング運営協議会会員には、3 月末に配布いたします。



## グループリビング運営協議会 会員募集中

グループリビングの暮らし方や運営について、一緒に考えていくことのできる仲間、情報提供してくれる仲間を作りませんか。

■グループリビング運営協議会 連絡先  
土井原奈津江  
[natsue@sfc.keio.ac.jp](mailto:natsue@sfc.keio.ac.jp)



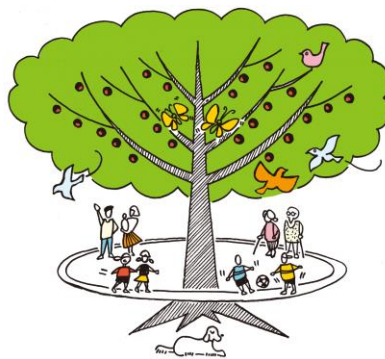
## 3月4日に暮らしネット・えんでー

神戸女子大学  
名誉教授 上野勝代



3月4日、2016年度新座ワークショップが開かれた。私は開始前早くから会場に来られた80歳の女性と話をすることがあった。彼女はまだ元気なのだが、一人暮らしが不安になって、あちこちの高齢者住宅や施設の資料を取り寄せ見学してきたが、その作業にすっかりくたびれたという。そのほとんどは、食事が提供され、世話をされる立場になっているが、私はできることでは役に立ちたい。寂しいので、一緒に共同で住みたいが、自由な暮らしがしたいと語る。まさにグループリビングの暮らし方を求めている方である。この方と話しているとその思いや気持ちがよくわかり、すっかり同じ思いにひきこまれていた。今までも、こうした話を聞く機会は多かったのに、なぜ、今回こんなに引き込まれたのだろうか？私は自分の変化に驚いた。一昨年大学を退職し、生活スタイルはガラリと変わり、経済状況も激変した。こうした変化が話を聞く相手を見る視点や感情に影響を与えているのだ。しかし、これは悪いことではないぞ、当事者の気持ちに一步近づいたんだからと納得した。

定年で退職してからは現場からひっこむのが普通かもしれないと、この2年迷ってきた。しかし、それは私にとってよくないことに気づいた。現場の人たちから学ぶことほど心躍るものはない。身体は後ろからよぼよぼついて行くかもしれないが、思いはしっかりと若い人に学び、みんなと同じ方向に向って歩いて行きたい。今後ともよろしく願いいたします！



## 特集

### なぜ有料老人ホームやサービス付き高齢者住宅に登録していないのでしょうか？

昨年、会員の宮野順子さんから「そもそも、グループリビングの運営者のみなさんは、有料老人ホームやサービス付き高齢者住宅への登録を拒否する理由は、どこにあるのでしょうか。（否定ではなく確認の意味です。）」という質問がありました。

登録をされていない運営者の方々にその理由を述べていただきました。昨年から行政指導がきびしくなってきたようです。このことを整理し、社会に向けて発表することは意義があると思いますし、何かしら問題提起ができればと考えています。

---

### 介護等のサービスの提供が事業としてではなく、 構成員の相互扶助により行われているからです

NPO 法人いぶりたすけ愛  
理事長 星川光子

いぶりたすけ愛は有料老人ホームやサービス付き高齢者住宅への登録を拒否しているわけではなく、Q&Aにある

Q「専ら特定の活動を行う団体等の構成員のみを入居対象とする施設において、高齢の構成員も入居し、食事の提供等を受けていますが、有料老人ホームの届け出は必要でしょうか？」

A「介護等のサービスの提供が事業としてではなく、構成員の相互扶助により行われている場合は、届出は要しないものと考えます。」

に当てはまるということを主張し、登別市にも認めてもらっています。

いぶりたすけ愛は市民互助団体であり、会員制です。市民の自発的な活動を有料老人ホーム、サービス付き高齢者住宅とされることには抵抗があります。

また、スプリンクラーの設置は大きな負担です。当会では、年2回の避難訓練をすることを市と決めています。

---

### それは、グループリビングが社会福祉事業ではなく、 「社会公益事業」だからです

NPO 法人結いのき  
専務理事 井上 肇

私たちがグループリビングを知ったのは西條節子先生の講演がきっかけでした。お話を聞く限りでいえば「晩年の理想的な生き方」というのが正直な感想でした。誰しものが特養や施設で晩年を過ごすのは嫌だと思っています。それだけに自分が住むなら気の許せる相手と共同生活をする。このことは理想的な選択で、それを表現させたグループリビングの存在に感心しました。

その後、自分たちの組織がグループリビングを建設し運営することになると、改めて「COCO 湘南台」へお邪魔し、入居されている皆さんからの声を直接聞くことにより、共同する仕組み（食事やお風呂）や個人の

尊重（自由な時間、他人を干渉しない）を守りながら、いわゆる高齢者版「トキワ荘」という印象がありました。またコーディネーターは西條先生であり、その存在そのものが「規約」という感じをうけました。

公益法人 JKA による高齢者共同運営住宅に対しての補助金があることを知り、早速応募することにしました。JKA 関係者との話し合いの中で特に印象的だったのが「この補助事業は福祉施設ではありません」ということを繰り返しておられたことです。特に私たちの特定非営利活動法人結いのきの基盤組織である生活クラブやまがた生活協同組合では、組合員活動による「たくろう所」と「認知症対応型グループホーム」を運営していました。そのこともあって「高齢者共同運営住宅を有料老人ホームや高齢者福祉関連のサービス事業の延長ではない」と私たちには言いたかったのでしょうか。しかし、その点は結いのきとそれを支えていくボランティア団体は、既に大江教授にも講義を受けていたので、JKA から言われるまでもなく「必須条件」として認識していました。ヒアリングの時には、JKA 理事者が私らの考えに感銘していただいたのが救いでした。

実際に入居される方々には身体の不自由な方もおり、身内のお世話を断って自立したい希望者でした。また、退職後、東京からの U ターン者、自宅を処分して入居する女性、リビングの宣伝をお願いしていた喫茶店のマスターが「私が入居します」とか、一度動き始めると徐々にですが 10 部屋は満床となりました。このマスターがキー（鍵）となって共同住居らしくなっていったと思います。また一人ひとりへの詳細の対応は、結いのき常務理事の松本由美子によるところが多く、後に認知症や自立が難しくなるとグループホームへの移動やデイサービスセンター利用などがありました。グループホーム結いのきは特養に入れられない方々の、もう一つの入居所になっていましたから、私から見ればグループリビング出身者のお陰で「理想的な共同住居」になってきたと、意外な効果がありました。

あらためてグループリビングは「COCO 湘南台」で掲げた「自立と共生の 5 つのキーワード」を基準とすることが極めて大事であり、そのことで有料老人ホームやサービス付き高齢者住宅とはまったく違う形態であることを打ち出す必要があるでしょう。

私はあえて言うならグループリビングは社会福祉事業ではなく、「社会公益事業」の分野だと思います。しかも発信者は入居者個人です。最もこれから重要な分野として、個人の尊厳と社会を結ぶグループリビングは理想的な共同社会の基礎になることでしょう。

（この特集は、次号も継続し各運営者の方にお考えを述べていただく予定です。）

#### 編集後記

高齢期、自宅から転居したいと考えたその時の自分の心身状況や考え方、経済力によって、自分にあった住まいの選択肢が住み慣れた地域の中にみつかるといい。例えば元気な時に仲間と一緒に過ごせる住まい、介護ニーズが高くなり自宅での一人暮らしが難しくなった時でも、そこに移り住めば自由に暮らせる住まい、病気や障害を持っていても普通に暮らせる住まい、退職後から入居し仲間との関係性をつくりながら最期まで暮らせる住まいなど、様々な良質な住まいの選択肢が広がるといい。

編集委員 小島美里 土井原奈津江

この会報は、競輪の補助を受けて作成しました。

<http://ringring-keirin-jp>



**RING!RING!**  
プロジェクト  
競輪の補助事業